

AFTERNOON TEA

臨床医の基礎研究

岡山大学学術研究院教育学域

大守（川崎）伊織

岡山大学の平山晴子先生からバトンをうけました大守伊織と申します。平山先生とは同大学の動物資源部門でお目にかかることがあり、よく家庭菜園談議になります。

私のキャリアは臨床医と基礎研究者と半々くらいです。それぞれの職種での経験を雑ぱくにお話させて頂けると幸いです。

私のキャリアは1990年代小児医からスタートしました。専門領域は神経系で、てんかん、神経発達症（自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、協調運動症など）、脳性麻痺、代謝異常疾患、筋疾患などが診療対象になります。医学部を卒業してすぐに臨床医どっぷりの生活を10年ほど過ごしました。臨床医の10年間は平日に家族と夕食を食べたことが1日もありません。これは大げさではなく、本当に。義母がいつも子どもに夕食を食べさせてくれていました。大学院生の4年間はただ働きでしたし、今になって振り返ると異常だと思うのですが、周囲が皆そのような状況だったのでその異常さを認識することはなく、過労死はしたくないと頭の片隅で祈りながら、ひたすら患者さんのため、と思って働きました。女性医師は流産、切迫流産、切迫早産がよくあり、切迫流産で安静入院中にクビになった人もいます。知り合いの妊娠した3人の医師全員がいずれかだったので、私は全体統計を知りませんが、高率だったと実感しています。上司の誰かが意地悪であったのではなく、この問題は医療体制に起因していたと思います。職場環境の過酷さから、妊娠出産をきっかけに離職する女性医師が一定数いました。私は、退職せざるを得なかった女性医師の復職支援活動の手伝いを数年していました。どれだけお役にたてたか分からなかったのですが、最近嬉しいことが



小児科医時代を支えてくれた義母のバラ。後を継いで育てています。

ありました。コロナワクチンの接種会場で、20年以上前に支援した女性医師がいて、その方が「(私から)電話がかかってきて、悩みを一緒に考えてくれたことで復職できた、人生が変わった」と言ってくださいました。「握手をしてください」と言われたときには、照れるような、とても嬉しい再会でした。女性医師の復職支援活動のように、目先の何かの利益が見えていなくても、つらい思いをしている誰かに寄り添う活動は、自分自身の人生をも豊かにしてくれることを学びました。

2000年代に入って、私は基礎研究にシフトしました。小児神経領域は診断がつかない難病や、診断がついたとしても治療法のない先天性の単一遺伝性疾患が多くありました。毎日が患者さんの診断をつけることだけを目標にしているように思えて、医師としての仕事にだんだんと閉塞感を覚え

るようになりました。30代半ばでしたが、退職までの残り30年間は難病の治療に関わる研究に自分の時間を使おうと思って、基礎研究の道に進むことにしました。あれから、20年(きみまる風)。私自身ができたことはほんの少し、できなかったことは沢山。しかしながら、この間に多くの基礎研究者の努力によって、次世代シーケンサーが登場し、これまで原因不明の疾患がどんどん診断されるようになりました。単一遺伝性疾患の治療も目を見張るほど進歩しています。一部の代謝疾患、

筋ジストロフィー、脊髄性筋萎縮症などには核酸医薬品が保険診療で行われるようになりました。遺伝病は治らない、から単一遺伝病は治せる時代が到来しようとしています。ダイナミックな時代の流れを感じつつ、私は、現在も酸化ストレス障害の基礎研究を続けています。残された研究期間は短くなってきましたが、酸化ストレスによる神経変性、臓器の線維化、老化などの発症機序の一端を解き明かしたいと思っています。



日本とアメリカの剣道のはなし

熊本大学生命科学研究部中枢性代謝制御学講座

戸田 知得

熊本大学生命科学研究部中枢性代謝制御学講座の戸田知得と申します。名古屋大学の中島健一郎先生からバトンを頂きました。中島先生とは年齢も近く、摂食・味覚に関する研究で素晴らしい成果を上げていて、いつも刺激を受けています。アフタヌーンティーは学会誌の中で私が一番よく読んでいる箇所です。多くの学会員のみなさまが読んでいますので、少し緊張しながら書いていますが、せっかくだので研究以外のことを書こうと思います。ちなみに私は脳による体内エネルギーの感知機構と食欲や末梢代謝を調節する脳回路について研究しています。

私の趣味は剣道です。小学校から始めて42歳の今も続けています。不思議と剣道の強い地域と縁があるようです。大学では明治維新で失業した武士が移り住んだ北海道の獣医学部に行き、大学院は家康の生誕地の岡崎(生理学研究所)、留学後は北海道で6年過ごした後に熊本に移動しました。それぞれの地域でどんな剣道が好まれるかが違います。北海道は「突き」が有名な先生が多いので、竹刀を構えあったときお互いの中心を取り合うことを重要視します。もし何も考えず打ち込んでいくと、相手の竹刀が自分の喉に突き刺さります

(もちろん痛い)。九州は激しい剣風で知られており、どんどん攻めてくる先生が多いです。といっても、打ちまくるのではなく、お互いに打ちにける距離まですぐ入って、プレッシャーをかけ、相手が打とうとしたとき、受けようと手元が上がったとき、迷って動きが止まったときなどで一本を取る剣道です。そのプレッシャーに負けて先に動いてしまうと相手のペースで運ばれてしまうし、止まってもダメです。逆にこちらからもプレッシャーをかけていく胆力の比べあいのようなものが剣道の醍醐味です。岡崎は剣道としてはその中間くらいでバランスの取れた攻防一体の剣道をします。

どの地域にも共通するのは、たまにクソ強いおじいさんがいることです。60歳以上と思われる先生に、スピード体力があるはずの大学生が手も足も出ない。それを可能にする運動機能とは別の何か(秘密・コツ)があるはずなので、それを知りたいというのと、自分もそんなおじいさんになりたいという思いで稽古を続けています。生理学会などで年長の先生方が鋭い質問をしているのを見て尊敬し、そんな歳の取り方をしたいと思うのと全く同じです。



留学は New York マンハッタンと Boston の間 (コネチカット州) にある Yale 大学でした。5 人くらいで活動する Yale Kendo Club があって、留学前に連絡して防具を持って渡米しました。Yale はハリーポッターのような雰囲気のカンパスで、体育館 (Payne Whitney Gym) もレンガ造りの大聖堂のような外観です。その 5 階のバレースタジオで週 2 回稽古したのは良い思い出です (写真)。Harvard, Cornell (NY 州 Ithaca), NY University, Boston University など、大きな大学には剣道部があり、Cornell kendo tournament や Harvard Shoryuhai といった大会もあります。アメリカに 4 年以上滞在すると全米大会 (AUSKF National) に出場でき、私は NY shidogakuin のメンバーとして団体戦 2 位になりました。アメリカの剣道は、日系人の多い西海岸の方が強く、ベスト 4 以上はいつも西海岸のチームになるところを東

海岸のチームが史上初決勝まで行ったということでチームメンバーは涙を流して喜んでいました。このような経験が私の人生を豊かにしてくれて、研究でうまく行かない時も精神的に不安定にならずに済んでいる理由だと思います (剣道で精神統一できる、みたいなのは私には無理で、運動や他者とのコミュニケーションによる効果だと思います)。

生理学会会員のみなさまで NY や Boston で稽古がしたいという方は、私までご連絡いただければ現地の日本人とつながりますよ (toda-c@kumamoto-u.ac.jp)。熊本で稽古したい方もどうぞ。

話は変わりますが、最近、熊本大学で独立しました。剣道部員ではなく大学院生募集中ですので、興味があればご連絡ください。



サンタクロースを捕まえる方法

旭川医科大学生理学講座神経機能分野

野口 智弘

旭川医科大学生理学講座神経機能分野の野口智弘と申します。同じ大学の生理学講座自律機能分野の金子智之先生からご近所のよしみでバトンを頂きました。金子先生が本学に赴任されて10年近く、機会があるごとにお互いに研究者としての生存確認を取り合っています。あらたまったものではなく、廊下でばったり会ってからの長い立ち話が多いです。日常の場面で受ける刺激は私にとって貴重です。研究者として生き残る道を手探りしている状況を「そうだね」「がんばろうね」と励まし合っている甲斐あってか、いまのところは私もまだなんとか研究者をやっています。

上の文章、我ながらずいぶん気弱に書いてしまいました。もっと胸を張ってシャキッとしなさいと言われそうな気がします。でも、そんなに少なくない人がこっそり頷いてくれると思うのですが、職業として基礎研究を続けるには運も必要です。研究上の発見だけではなく、人生の岐路においての運が大きい。私が本学に着任したのは2007年11月、当時の本分野教授だった柏柳誠先生に助

教として採用して頂きました。その頃の私はカナダ・マギル大学でポスドクをしていたのですが、任期切れが目前に迫っており、博士持ち無職になる危機でした。そのときに柏柳先生に声をかけてもらえたのは大げさではなく奇蹟です。採用理由として、旭川は寒いけど、同緯度のモントリオールでポスドク3年半やったのなら大丈夫だろう、と冗談めかして言われました。おそらく半分以上は本気だったのだろうと思っています。旭川は本当に寒いですからね。

この原稿を書いている11月後半、雪は降りましたが、平地ではまだ根雪にはなっていません。ホワイトクリスマスまではもう少し間がありますが、先日、ショッピングモールでクリスマスツリーの点灯式がありました。休日にたまたま家族で行ったのですが、イベントでは点灯と同時に吹き抜けの天井から大量の風船が降ってくる演出があると聞きつけ、風船が欲しい娘と妻はぎゅうぎゅうのすし詰め状態となったイベントスペースへ果敢に挑んでいきます。私はツリーの点灯と同時に風船が降る場面を俯瞰で撮影しようとして吹き抜けの3階へと向かいます。始まったカウントダウンがゼロを数え、クリスマスツリーの色鮮やかな電飾が点灯すると、待ち受ける人々の頭上へさまざまな色と形をした風船が大量に降り注ぎました。ちょっとした祝祭を思わせる光景を動画に収めて満足した私は、家族と合流するためにエスカレーターで下っていきます。すると、自分とほぼ同じ背丈のサンタクロースの風船を抱えた娘が待ち構えていました。たぶん、いちばん大きな風船のひとつで、娘は誇らしい顔をしています。

このエピソードを教訓のように解釈すると頭の固い考え方になるのかもしれませんが、降ってくる幸運をつかまえるにはそこに居続けなきゃいけないということだと思のです。どれだけ身動きするのに不自由で立っているだけでやっという



降ってきたサンタを見事捕まえた娘

環境でも、そこを俯瞰して眺める場所に行ってしまうのは風船は手に入らない。そこで私は基礎研究のフロアには立ち続けたいと思います。もちろ

ん、風船自体がもう降ってこない可能性はありますが。